

## 自我境界と対人行動(2)

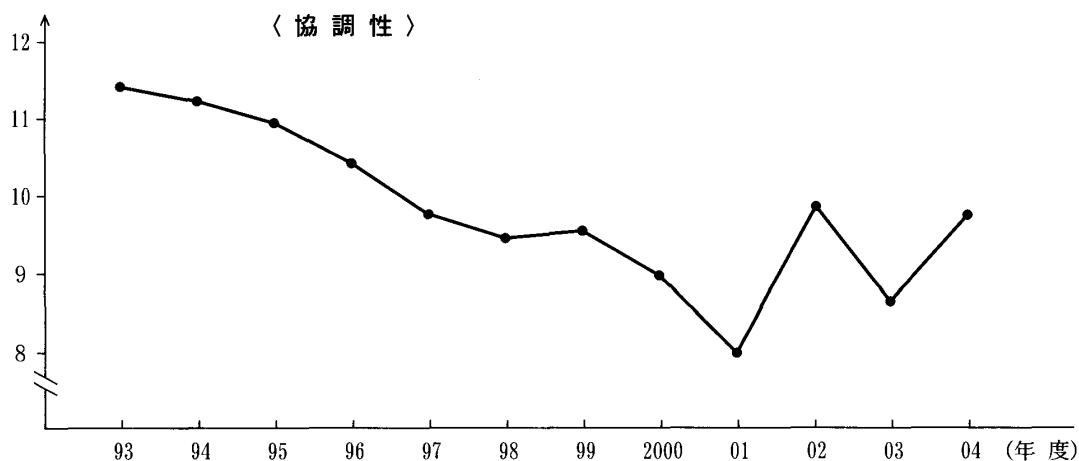
大山 俊 男

## Ego-boundary and Interpersonal behavior (2)

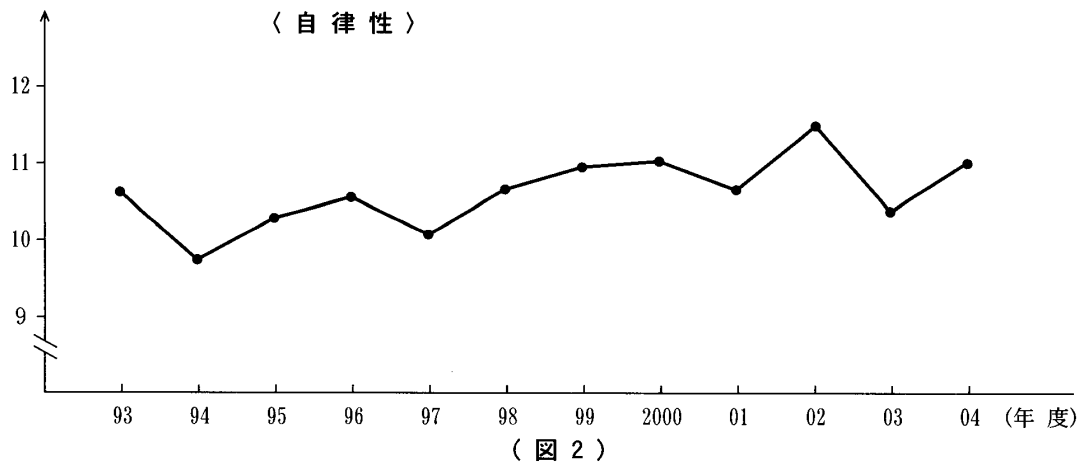
Toshio Ohyama

自己と非自己の境界は自我境界と呼ばれているが、Federn (1928) にならい、自我と外界との間を外的自我境界 (external ego boundary)、自我と内界 (エス) との間を内的自我境界 (inner ego boundary) と定めて、個人の対人行動とこの自我境界の関係を考察している。前回、著者 (1999) は青年の対人行動が互いに親密な関係を避ける方向に向っている傾向を「協調性」得点の推移から眺め、自我境界の特徴について論じた。今回も同じ観点からその後の経年変化を追跡している。

調査は医療系専門学校で1年次に試行している各種の心理学検査から、いくつかを収録している。まず「協調性」得点の経年推移を前回98年度までのものを含め、12年間眺めて見る。(図1) 検査項目はYG性格検査に準じているが、10項目中2項目をより内容が明確になるよう修正してある点と、高得点になる程協調性が高くなる点がオリジナルとは異なる所である。98年度までは得点の漸減が認められたが、今回の調査では同様の傾向が2001年度までより鮮明に認められる。検定の結果、調査を始めた93年度と98年度以降、01年度までとは1%水準で有意差が認められた。つまり「協調性」得点ははっきり低下をして来た。ところが、02~04年度については今までとは異なる推移を示している。ゆるやかな得点の漸減が止まり回帰するようにも見られる。そこで



(図 1)



「協調性」得点は01年度まで8年間に見られる漸減傾向と以降3年間の変化傾向とに分けて検討する必要があるであろう。

次に同じバッテリーの中に組み込まれている「自律性」得点の推移を眺めて見る。(図2)検査項目はEPPSと同じ10項目を使用している。グラフから読み取れることは12年間で変動はおよそ1ポイントの中で収まっている点である。つまり「自律性」得点の経年変化は非常に小さく、安定しているのが特徴と云えるし、この点で「協調性」得点とは様相を異にしている。

一般に、「協調性」は対人関係で自己の立場に固執せず、相手との間に軋轢が生じる事態でも上手に調整して切り抜ける能力を意味する。調整は相手と自己の間で行われるので対他的、対自的両側面を持つが、具体的には自己主張したり、折れたりする行動として検出される。つまり、他者や集団を十分意識し行動の結果を予想する判断が必要であって、人間関係で緊張よりも円滑な進行をめざす志向性が要請される概念であろう。

個々の存在よりも全体としてのまとまりが優先された日本文化では、「協調性」を備えていることが重要な資質として捉えられて来たことは明らかであり、この項目を調べるYG性格検査が外国の翻訳ものでありながら息長く使用されて来た理由も了解される。

ところでYG検査の「協調性」が上述したような対人的柔軟性を測定しているかについては慎重な検討が必要である。10項目は対人場面での具体的行動よりも、行動を実行する際の前提条件や内面状態を問う項目が多いからである。

- 7. 世の中の人とは人のことなどかまわないと思う。
- 19. スパイのような人がたくさんいる。
- 31. 親友でもほんとうに信用することはできない。
- 43. 人がみていないと大てい人は怠けると思う。
- 55. 人の親切には下心がありそうで不安である。
- 67. 人は結局私利私欲のために働くのだと思う。

- 79. 不満が多い。
- 91. たびたび人の気持を確認してみたい。
- 103. 自分はいつも運が悪い。
- 115. 人は私を十分認めてくれない。

これらの項目は、人間は善意を持って愛他的に行動する存在であり、他者によって正当に評価され受容される存在であり、他者の行動に懐疑的にならず肯定的に関係を維持しようとする存在であるという認識をチェックしているように思われる。云い替えるならば、自分を取り巻く世界は信じるに足るものかという基本的信頼感を問うているとも云える。もちろん、これらのいわば前提条件が十全であれば、結果として対人行動は積極的に進められ他者を優先して一步退くことも厭わぬ、協調性が発揮されることは予測できよう。

そこで「協調性」得点の漸減傾向をこの前提条件の欠除と捉えるならば、いかなる理由が説明されるだろうか。このとき前掲の「自律性」得点の推移は参考になる。「自律性」とは周囲の働きかけや圧力にも拘らず、これらから独立的に行動して自己を失なうことが無いこと、尚且社会から孤立せず適応できる能力をいう。このことから「自立性」は、対他的関係の維持に傾斜のかかる「協調性」とは背反する要素が込められていると考えられよう。「自律性」にウエイトをかけることは相対的に「協調性」の低下を招く可能を持つ。しかしながら図2が示すように、「自立性」得点はバラツキが小さく安定しているし、前回の調査でも指摘したように「協調性」得点と連動している様子は認めにくい。つまり両者は単純な連関を示してはいないことになる。

次に「協調性」得点の漸減に関わる要因として世界に対する基本的信頼の欠如が対人不安を助長している可能性を検討したい。一般に基本的信頼感は人生初期に養育者との係わりの中で形成される。養育者に受容されているという安定感が見知らぬ他者へも般化して行くとされている。この作業が躊躇されたり回避されたりするとき、対人不安の増大が仮定される。

辻(1998)は、性格の5因子モデルに関連してYG性格検査との相関を報告している。(図4)その中で協調性(Co)がビック・ファイブとの間に持つ相関を見ることができる。これによればCoが最も高い相関を示しているのは「神経症傾向(N)」であり、0.55。次が「外向性(E)」で-0.34、さらに「調和性(A)」が-0.33。「開放性(O)」が-0.24。「誠実性(C)」が-0.19という結果である。これはYG性格検査の「協調性」が複数の下位次元を持ち、とりわけ「神経症傾向」の負荷が大きいことを物語るものである。

今回もバッテリーの中にCAS(キャッテル不安尺度)を組み込んであり、その継年変化を示す。(図3)Lは疑い深さ、またはパラノイド型の不安定性を示す因子である。また、 $Q_3$ は低統合を、 $Q_4$ は高緊張を示す因子であり、 $Q_3 + Q_4 \geq 13$ のとき高不安傾向と判定される重要な尺度である。しかし、3尺度の推移からは不安が増大して来ているとは判定できないし、Lの得点はAu以上に変動が少ない。(図5)このことから負荷の大きな「神経症傾向」は増大傾向にあると

〈各得点の年度推移〉

	93	94	95	96	97	98	99	2000	01	02	03	04
協調性	11.40 (3.42)	11.21 (3.79)	10.92 (3.22)	10.44 (3.22)	9.81 (3.90)	9.51 (3.49)	9.63 (3.62)	9.02 (3.57)	8.02 (3.00)	9.90 (3.17)	8.67 (3.25)	9.86 (3.39)
自律性	10.62 (2.86)	9.70 (2.71)	10.25 (3.1)	10.52 (2.92)	10.06 (2.73)	10.67 (3.16)	10.94 (3.00)	10.98 (2.79)	10.56 (3.38)	11.49 (2.64)	10.33 (2.80)	10.96 (3.04)
L	5.01	5.32	5.10	5.61	5.93	4.87	5.24	6.08	5.74	5.54	5.69	5.14
Q <sub>3</sub>	5.66	5.60	5.14	6.07	5.65	5.47	5.45	5.83	5.75	5.56	5.42	5.83
Q <sub>4</sub>	5.29	5.56	5.45	5.74	5.65	5.50	5.66	5.46	5.84	5.29	5.38	5.82
人数	65	70	65	64	64	65	62	65	43	70	75	76

(図3)

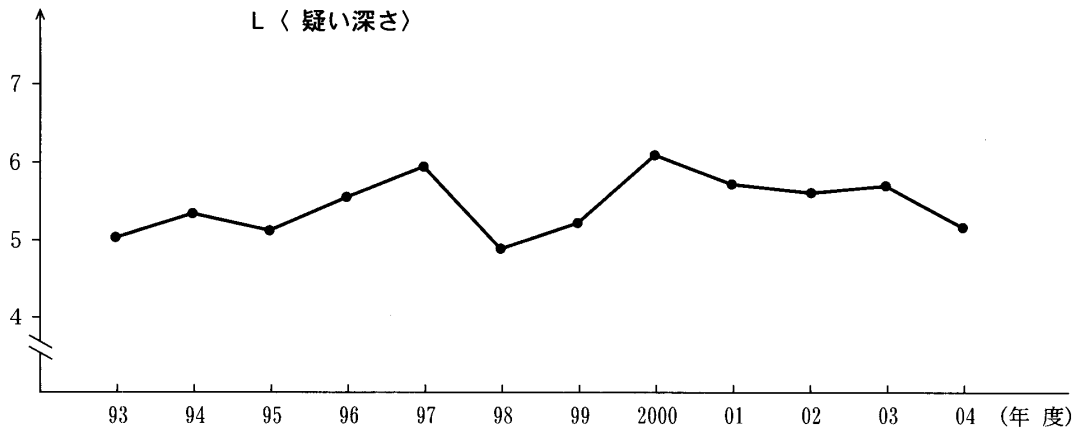
〈NEO-PI-RとY-G性格検査〉

Y-G 下位尺度	NEO-PI-R 因子				
	N 神経症傾向	E 外向性	O 開放性	A 調和性	C 誠実性
N 神経質	0.72	-0.40	-0.11	-0.23	-0.16
D 抑うつ性	0.68	-0.44	-0.06	-0.15	-0.33
I 劣等感	0.75	-0.37	-0.22	-0.09	0.28
O 客観性欠如	-0.53	-0.19	-0.24	-0.13	-0.30
C 回帰性傾向	0.70	-0.04	0.07	-0.15	-0.38
Co 協調性欠如	0.55	-0.34	-0.24	-0.33	-0.19
T 思考的外向	-0.40	0.37	-0.06	0.19	-0.19
A 支配性	-0.41	0.71	0.21	0.08	0.26
S 社会的外向	-0.33	0.78	0.19	0.16	0.13
G 一般的活動性	-0.45	0.65	0.13	0.27	0.42
R のんきさ	0.00	0.67	0.21	0.05	-0.23
Ag 愛想の悪いこと	0.20	0.36	0.28	-0.21	-0.09

(図4)

は考え難く、他の因子に原因を帰属させるべきであろう。

次に因子負荷量の大きい「外向性」および「調和性」の下位次元には解釈のヒントがある。(図6)「外向性」の下位次元に群居性、断行性、刺激希求性が含まれている。これは対人行動において他者の中へ進んで飛び込んで交渉時の刺激を享受したいということであろう。一方、「調和性」の下位次元には利他性、応諾、信頼が含まれている。これは依頼に対して計算づくではなく相手のために立ち上るということになるであろう。両者を対人行動で発揮することができれば、他者との関係を切り結ぶ強力なスキルとなり得るが、これが軽微であれば関係発展はおぼつかない。すなわち、当人に対人的不安が低くても対人スキルを学習していなかったり、持っていない



(図5)

〈NEO-PI-Rの構成〉

次元 (因子)	下 位 次 元
神経症傾向	不安, 敵意, 抑うつ, 自意識, 衝動性, 傷つきやすさ
外向性	温かさ, 群居性, 断行性, 活動性, 刺激希求性, よい感情
開放性	空想, 審美性, 感情, 行為, アイデア, 価値
調和性	信頼, 実直さ, 利他性, 応諾, 慎み深さ, 優しさ
誠実性	コンピテンス, 秩序, 良心性, 達成追求, 自己鍛錬, 慎重さ

(図6)

断行する勇気が伴わないとき、「協調性」は顕在化しないのではないか。

対人スキルの未修得については幼児期からの家庭環境、兄弟数、遊び形態等いくつかの影響は想像し得る。しかし今回の調査が示す02～04年度の推移を整合的に説明することはできない。さらに得点が上昇して「協調性」が増加するのか、それを対人スキルの獲得とするならば如何なる変化があったのか、継続した観察が必要であろう。

今回、自我境界と対人行動の関連については01年度までの「協調性」得点漸減に係わる箇所に止めざるを得ないが、「自律性」得点に変動が無いことから外的自我境界の性質が言及できるかも知れない。「自律性」が変動しないことは外部からの侵入を阻止する機能は一定であったが、「協調性」が低下したのは自己内部との不安を内的自我境界が調整する機能を果していても現実の対人行動を実行する段で、外部へ突き出る時の外的自我境界の可塑性に変化があったと解釈できる。これもさらにデータを積み重ねた上でモデルを仮構する試案にすぎない。ただ、中村(2004)がYG性格検査の年代的变化を大学生で検討し、Coを得点が増加する因子群、つまり「協調性」が低下していることを報告していることは書き添えておきたい。

〈参照文献〉

- 1, Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R., 1992, NEO-PI-R Professional Manual : Revised NEO Personality Inventory and NEO Five-Factor Inventory. Psychological Assessment Resources.
- 2, 大山俊男, 1999. 自我境界と対人行動, 大東文化大学紀要 第37号 社会科学 27-35
- 3, 辻平治郎編, 1998 『5因子性格検査の理論と実際』北大路書房
- 4, Federn, P, 1928. The Ego as Subject and Object in Narcissism, Ego Psychology and the Psychoses. New York ; Basic Books (1952) 283-322
- 5, 中村晃, 2004. 大学生の性格における年代的变化. 日本心理学会第68回大会発表論文集